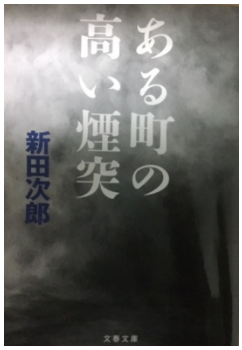
ある町の高い煙突



写真は新田次郎著の 2018 年 3 月刊の文春文庫。タイトルに惹かれて、大阪梅田の書店で手にした。読みだしたら止まらなかった。久しぶりに、長編小説を読みすすんだ。あとがきを紹介したい。

小説『ある町の高い煙突』を書かないかとすすめてくれたのは、日立市天気相談所所長の山口秀男氏であった。山口氏は元気象庁の職員であったが、日立市に日本で初めての市立天気相談所が出来るとともに、所長となって赴任した新進気鋭の気象技術者である。

私は山口氏に、日立の大煙突にまつわる話をざっと聞いた。それは明治から大正にかけて、急激に発達した日立鉱山の煙害問題について、鉱山側と被害者側の農民とが、互いに誠意を持って忍耐強く交渉に当たって、ついにこの難問題を解決したという夢のような話であった。

日本は世界一の公害国であり、あらゆる種類の公害が発生し、そして一つとして、完全に解決したということを聞いたことのない奇妙な国である。私は気象庁に長らく在職していたので、気象ともっとも関連の深い煙害について興味を持っていた。その煙害の問題が見事に解決された実例が、すでに数十年前にあったということは、まことに耳寄りな話であった。

私は山口氏の案内で日立市の神峯山に登った。そこには日立市が、日立鉱山から譲渡された、近代的設備を持った観測所があった。

この観測所が中央観測所となって、半径 30 キロメートル以内にばらまかれた 12 か所の観測所と直接電話連絡を取りながら、精錬所の排煙量をコントロールしていたのである。

神峯山をおりて日立市天気相談所で、神峯山観測所で観測した 50 年間の気象記録を見せられ、日本における最初の上層気流観測が、パイロット気球ばかりでなく繋留気球まで用いて 4 年間に渡って、この地で続けられた事実を知らされて、当時鉱山が煙害防止対策に示した熱意とその本格的な姿勢に感銘を覚えた。

山口氏は更に当時の農民側の代表として、煙害問題に活躍した関右馬允氏を紹介してくれた。

関氏の家は日立市入四間町にあり、歴史を感じさせるような旧家であった。関氏は日立鉱山にさえ無いような貴重な資料を多く保存していた。

関右馬允氏は現在 80 歳であるが、今でも若い者と山野を跋渉するほどの意欲を持った人であり、記憶はきわめて確実であり豊富である。この小説を書くに当たって、関氏に負うものはきわめて大きかった。

この小説を執筆中も連日のように公害が新聞紙上に載っていた。どの一つを取って見ても、泥沼的悲劇を予想されるものばかりであった。

公害は、もともと人間が作り出すものが圧倒的に多く、被害を蒙るのも結局は人間である。公害を解決せんがためには、まず人間の考え方を改めねばなるまい。

私は続出する公害に対する鬱憤を、『ある町の高い煙突』を借りて吐き出そうとしたのでない。

私は半世紀前に〝ある高い煙突〟を創り上げた良心と情熱とを兼ね備えていた一群の若き人間像を描きたいがために、この小説を書いたのである。　（1968 年 10 月記）

茨城県日立市の象徴である日立の「大煙突」について、この本で初めて知った。明治から大正にかけての公害、とりわけ煙害、大気汚染公害について学ぶことが多かった。6 月末に福島第一原発の視察のため、JR 常磐線で日立あたりを通ったこともあり、地図を見ながら読んだ。

日立の「大煙突」物語が、映画化されるらしい。ぜひ、映画も観たいものだ。

（2018 年 8 月 18 日）